

伝 伝えたい情報を身近な材料に刻んで版とし、それを圧することで始まる印刷。この「版」の発想が印刷という技術を生むこととなった。

「版」は印刷を成り立たせる要素の核であり、表現を生み出す源である。この「版」という仕組みは、「文字」を用いたコミュニケーションでも有効ではあったが、文字以上に「図」を用いたコミュニケーションを広く社会的なものへと推し進めた。

ウィリアム・アイヴINGSは『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』において、印刷図版は、写真が誕生していない時代から科学や生産技術の発展に大いに寄与していたと言及している。紙に転写された像の形(図版)を見ることで文字とは異なるコミュニケーションが生まれ、言語を超えた伝達が可能となった。また、版という方法で固定された像は、印刷によって複数化され、見た人すべてにとって「同一の画像」となる。

版の画像精度が向上するにつれ、伝達する内容もより高度になっていった。絵を写す(模写する)ことは、文字を書き写す(写字する)ことよりも、より正確に写しとる技術が必要である。正確に写しとることが可能になれば、正確な形態を複製することができ、その結果、文字以上の情報を伝達することが可能となった。こうした正確な図版を用い、印刷を利用することで成立した学問もある。考古学、民族学などがそれである。

また、近代の科学は、例えば顕微鏡や望遠鏡といった道具を使用することで、肉眼では見えない世界の観察を可能にした。その結果、これまでは想像や想定でしかなかった世界に新しい光が差し込まれることとなった。そしてそれは、「目で見ることが重要となった時代の現れでもあった。目に確かな形としてとらえ、提示することは、新しく不可欠なコンテンツになったと考えられる。

「記憶」は、書き留められて「記録」となり、記録は「版」によって複数化された。そして、版は「目に映る情報の共有化」という新しい価値を生んだのである。

図版による コミュニケーション — 版式の変遷 —



ニュルンベルク年代記

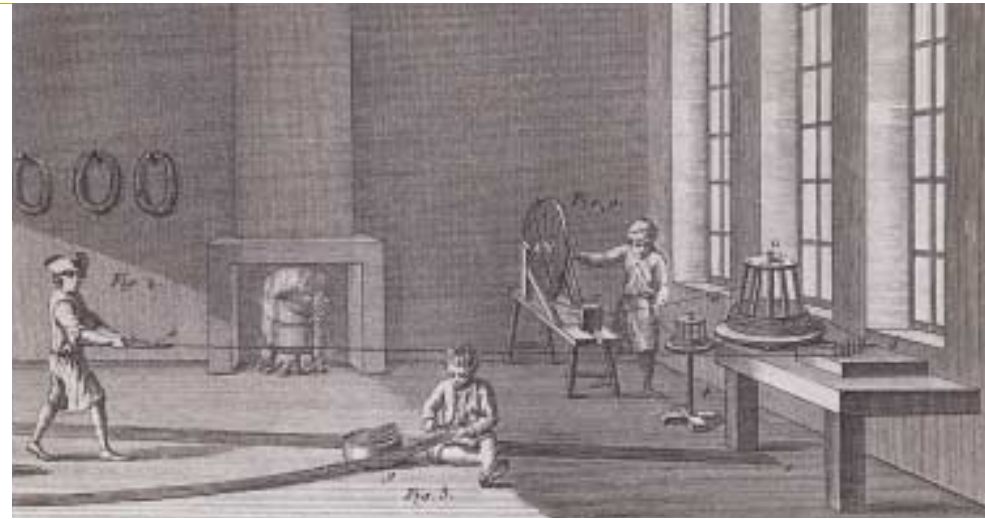
装飾・手書きの代用 凸版の始まり

図版印刷の初めは、木製の凸版で、板目木版と呼ばれるものである。板面に彫ることで図像が形成される。この版では当初、製版や印刷技術の稚拙さゆえに、細かな表現ができなかった。そのため、像は具体性に欠けるものとなり、さまざまな場面で象徴として多用された。

その一例が、1493年に刊行されたニュルンベルク年代記の人物表現に見られる。例えば、教会会議の図版は、同一の版によるものが複数ページで繰り返し使用されている。これらの図版は、装飾として用いられた挿絵であり、文字では伝達できない情報を「図説」として補うために用いられたわけではなかった。また、文字を印刷することが文字を書き写すことの代用であったように、手書きの挿絵の代用として印刷されたものであり、「同一の情報」を流布することの意味や図版による情報伝達が社会に与える効果に気づいてはいなかったのである。



教会会議の図版(ニュルンベルク年代記の別ページ)



ピン製造工場の風景(『百科全書』より)

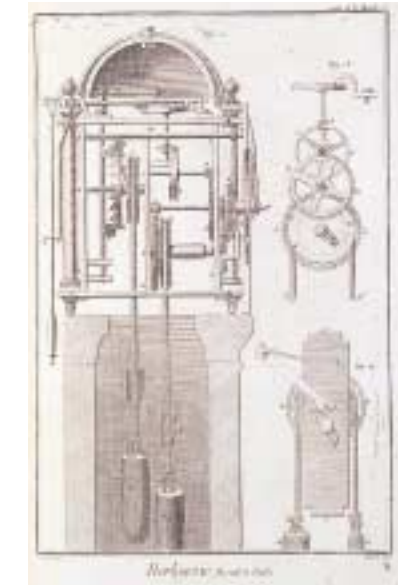
図像の力 凹版の開発

より精細な表現をしたいという欲求を解決したのが、彫刻凹版である。その発明はドイツにおいて1420~1430年頃の金細工の応用から生まれたとされるが、イタリアを起源とする説もある。ここでは、凹版の技術的な歴史でなく、細かい線を再現する版が製作かつ印刷できるようになったことで生まれた社会への影響について紙面を割きたい。

この版によって生み出された精緻な図版表現が何をもたらしたのか。デイドロとダランペールの『百科全書』(1751-1772年)をその例として述べる。『西洋をきずいた書物』(邦題)の中で、ヨーロッパ思想史における記念碑、理性の時代の頂点、旧制度を崩壊しフランス革命を予言した原動力であると解説されているこの『百科全書』は、収録された精緻な図版によって人々に多くの情報を与えた。

例えば、ピン製造職人の工場内風景の図版を見てみよう。よく見ると幼い子供が労働力となっているのが理解できる(図中央)。この図版は、ピンの製造法を伝えるだけでなく、当時の労働の姿をも物語っている。状況を正確に写すつまり「写実する」ことによって、本来とは別の意味をも含み伝えることとなったのである。

また、長きにわたって口伝と見様見真似で受け継がれてきた技術は、複雑な機械の設計図面を精緻な図版として印刷することで、「モノ」を通して正確に伝えられるものとなった。



複雑な機械の図説の例(『百科全書』より)

しかし、現在の百科事典同様の紙面構成は、まだ難しかった。なぜならば、そこには版式という壁があったからである。図版は凹版でつくられるが、文は凸版である活字が用いられ、同時に印刷することは不可能であった。これが、本文と図版を分ける重要な原因と考えられる。精密な図版と文字を同時に印刷するには、木口木版の誕生を待たなければならなかった。

多様な表現の獲得 平版の誕生

これまでの「版」は、彫るという行為のもとでその表現が形成されてきた。しかし、彫ることなく版をつくる平版という技術が誕生した。1798年、ドイツのアロイス・セネフェルダが発明したリトグラフという技法である。これは特殊な石を使用した版である。水と油の反発作

用を利用したこの方法は、従来の彫る作業から職人を解放し、多くの賛同を得ることとなった。

また、平版は、版式特有の表現だけでなく、凸版や凹版の表現をも行うことができ、以前よりも大きな版を製作、印刷することができた。そのため、これまでの書籍を中心とした印刷の活躍の場はより広がったのである。例えば、ポスターというメディアに大いに力を発揮し、商業美術という領域を育てた。ポスターは、のちにグラフィックデザインの中でも、重要な表現媒体となるのである。

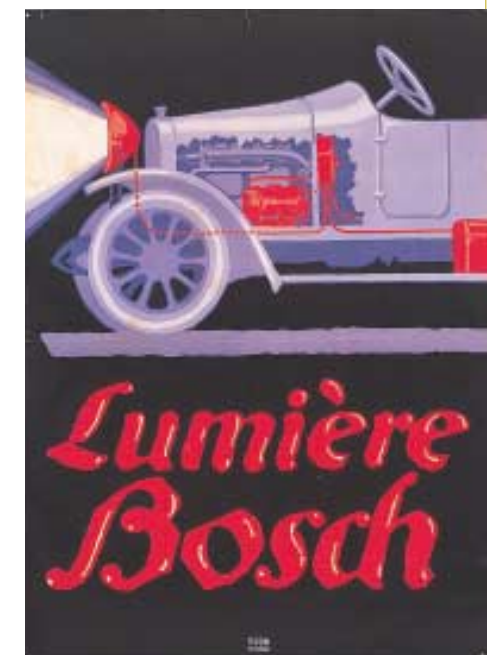
そして次には、凸・凹・平それぞれの版に、写真が取り込まれ、さらに新しい情報伝達を生むこととなる。

文：早川 浩(印刷博物館研究員)

参考文献：

- 『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』ウィリアム・アイヴINGS著 白石 和也訳(晶文社)
- 『ニュルンベルク年代記の誕生』エイドリアン・ウイリソン著 河合 忠信・雪嶋 宏一・佐川 美智子訳(雄松堂出版)
- 『西洋をきずいた書物』J.カーター・P.H.ムーア編 西洋書誌研究会訳(雄松堂書店)
- 『理性の夢-図版と文字で読むフランス18世紀-』鷲見洋一著(丸善)

掲載した図版はすべて印刷博物館の所蔵品です。



ポスター「リュミエール・ボッシュ」